

青斑石鼈合子と仙薬七星散

三宅久雄

はじめに

平成10年のキトラ古墳の天文図の発見はまだ記憶に新しい。天文図は古墳の天井などにしばしばあらわされたが、工芸品の類に星があらわされることはそう多くはない。また、昨年（平成12）には明日香酒船石遺跡から亀形石という画期的な発見があった。亀は一般にも好んで造形されたが、わが国古代においては立体造形品は、やはり数少ない。いずれも東アジアにおける日本を考えるために重要な意味をもつものである。

ここに取り上げた正倉院の青斑石鼈合子は（中倉50、口絵1 - 5、挿図1・2）星と亀ふたつの要素を併せ持つきわめて貴重な一例である。本品はまた彫刻作品として、傑出した写実的な動物彫刻であることも見逃せない。スッポン形の容器の背甲の部分に七星文があらわされていることは早くに知られていた⁽¹⁾。しかしながら、その意味や、この鼈合子の形式、用途などについてはこれまであまり研究されることはなかった。本論では亀⁽²⁾、北斗七星、それぞれの意味するところ、およびそのふたつの結びつきについて考察し、さらにそれを容器とした意図を探っていくことにする。



挿図1 中倉50 青斑石鼈合子 俯瞰



挿図2 同左 腹部 皿を納めた状態

1. 青斑石鼈合子の技法など

[寸法等] 鼈形本体 長15.0cm、幅10.0cm、高3.5cm、重390.6g。

八稜形皿 長径8.0cm、高1.6cm、重69.7g⁽³⁾。

スッポンの形をした容器で、被蓋造の合子である。本体は蛇紋岩（青斑石とも呼ばれる）からスッポン形を彫り出しており、この本体が蓋となり、その腹部を長八稜形に割り込んで、そこに同じ長八稜形の高台付の皿がすっぽりとおさまるようになっている。両眼には深紅色の琥珀を嵌入する⁽⁴⁾。

背甲には北斗七星の反転した形をあらわしている。七星文は丸い星を線で繋ぐ形式である。星を円、星と星を繋ぐ線を二条、それぞれ浅く細い線彫であらわし、その輪郭線の内側を星は銀泥、線は金泥（または粉）塗りとする⁽⁵⁾。上脛の上方（眉にあたる部分）に赤、そこから頭頂にかけて、及び鼻先の割込み線には金泥が付着する。これらは明らかに意図的に施された彩色とみられる。さらに金泥は本体と皿の各内面を除き処々に僅かに残るが、本体の下面にまで及んでいるので、七星を描く際にたまたま付着したとは思えず、何らかの色彩効果を意図して全面に金泥（または粉）を散らした可能性がある。

材の蛇紋岩は本体と皿の外表面は茶緑色を、各内表面は青緑色を呈している。表面は透明感があり、かなり滑石化している。また紫外線を照射すると本体と皿の内表面を除き橙色の蛍光を発するところから、全体に油または樹脂様のものを塗布しているかと思われる⁽⁶⁾。

首は正面し、やや上方にあげ、静止した姿で、腹内に皿を納めた状態では、一見、丸彫りの動物彫刻そのものであり、多彩な正倉院宝物の中でもまことにユニークな品である。

本品の特色はまずそのリアルな表現にあるだろう。微妙な抑揚をつけて柔らかな甲をあらわし、爪の生えた四肢は粗く鋭い彫りをまじえて、大づかみではあるがよくその特徴をつかんでいる。吻が細長く前方に突きだし、つぶらな両眼で、その表情には愛らしさが感じられるが、一方、大きく裂けた口唇は、“食いついたら放さない”と言われる獰猛な性質を思い出させる。造形に破綻はなく、誇張や意匠化の傾向もみられず、スッポンの生態をとらえた表現には熟達した写生の技量が示されている。繊細な技巧や華麗な装飾が衆目を集めがちな正倉院宝物の中にあっては、むしろ地味で目立たないが、写実表現ということではまず第一にあげられるべき作品であろう。

製作の時期と場所

蛇紋岩は石材としてはそれほどめずらしいものではなく、中国では石英、大理石や玉髓とともにいわゆる広義の玉として用いられる。わが国では古代の工芸、彫刻などに用いられた例は意外に見あたらない。しかし正倉院宝物中には、

雑玉双六子中の黒碁子（北倉18）

彫石横笛（北倉33）

彫石尺八（北倉34）

黒碁子（北倉25）

青斑鎮石（北倉155）

青斑石硯（中倉49、挿図3）

青石把漆鞘金銀鈿荘刀子

（中倉131）

などがあり、数多いとは言えないが、古代における蛇紋岩の使用例がまとまってみられることは注目しておいてよい。



挿図3 中倉49 青斑石硯

このうち彫石横笛と尺八、碁子はいずれも国家珍宝帳記載の品であり、天平勝宝八歳（756）六月二十一日以前、また青斑鎮石は屏風花氎等帳記載の品で、同年七月二十六日以前の製作ということになる。青斑石硯は建久四年（1192）の宝物点検記録によると、中倉にあった絵櫃の天平勝宝五年七月一日付の銘にみえる納物中の「研一基⁽⁷⁾」に当たると考えられる。また蛇文岩の床石に据えられた風字硯の形式と台の木画技法から唐製と考えられている⁽⁸⁾。青石把漆鞘金銀鈿荘刀子は把が真っ直ぐで、刀身は大型で筈反りの形状を呈しているところから唐刀子とも言われ、鋼も他とは異質であると指摘されている⁽⁹⁾。黒碁子は国家珍宝帳によると銀平脱合子（北倉25）に容れて、百済国義慈王（660没）が内大臣藤原鎌足に贈った赤漆観木厨子（亡失）に収納されていたもので、もし厨子と収納物が元来、一体であったと考えるならば、七世紀半ばに遡る百済製という可能性も出てくる⁽¹⁰⁾。彫石横笛や尺八、青斑鎮石も国産説を唱える積極的な根拠もなく、これら正倉院の蛇紋岩製の品々は概ね七世紀後半～八世紀前半の舶載品とみて大過ないであろう。鼈合子は中国の美術書に唐代の作品として掲載しているものがあることも頷けるところである⁽¹¹⁾。亀の立体造形品は時代を問わず、ほとんどが意匠化、抽象化されており、類品と比較しての年代推定は困難である。ただ、立体造形作品としての作風を考えれば、仏像、とくに材質ということでは石彫の仏像彫刻、また動物表現ということでは古墓出土の三彩馬などとの比較から製作年代を推定することもあながち無理ではない。本品は鼈という形もあって、一見、姿態には生硬な趣を感じさせるかもしれないが、背骨が浮き出た背甲の微妙な曲面と柔らかな質感表現を見ると、概ね初唐の終わりから盛唐の初めにかけての頃、七世紀末から八世紀初め頃、仮に本邦製とするならば八世紀前半と考えて大方の異論はないであろう。皿は八稜形を呈するが、中国において八稜鏡が現れるのが八世紀初めであることとも矛盾しない⁽¹²⁾。

伝来

本品は現在、正倉三倉のうちの中倉に納められている。天平勝宝八歳（756）六月二十一日の『国家珍宝帳』にはじまる光明皇太后による一連の大仏への献納目録中には見出せず、降って永久五年（1117）南倉のはじめての点検記録『綱封蔵見在納物勘検注文』や、はじめて点検が

中倉にも及んだ建久四年（1193）の『東大寺勅封蔵開検目録』にも登場しない。正倉での存在が確かめられるのはようやく近世になってからで、当時は南倉に納められていた。元禄六年（1693）破損した正倉の修理のため宝庫の封を開き点検が行われた。点検二日目の五月十七日の南倉階下の点検宝物中に「青石亀造物壺ヶ 凡四寸許也¹³⁾」と見える。その後、天保四年（1833）の宝物点検時にも、南倉に「青石亀造物 一箇凡四寸許有¹⁴⁾」と記録している。蛇紋岩を指すと思われる「青石」とあり、寸法がほぼ一致するところから、鼈合子のことと見て間違いのないであろう。何よりも興味を惹くのは、両本とも“亀の合子”とは呼ばずに「造物」としていることである。一見、亀の置物のように見える本品の形態からして無理からぬところではある。

中倉に納められるに至ったのは、明治25～37年にかけて宮内省御物整理掛が、江戸時代には既に混乱していた正倉三倉の宝物の配置を由緒にもとづいて整理し直した結果である。明治末年に作成された『正倉院御物目録』中倉の部には、筆、墨、紙と続き、青斑石硯の次に鼈合子が記載されている。由緒の不明なものは用途別にまとめているから、一応、硯に関係ある文房具とみなしてここに掲げたのであろう。

2．亀と北斗七星

亀の造形

本品の形は、柔らかな背甲、長く突き出した吻などの表現からスッポンであることは明らかであり、かねてより形態的特徴からシナスッポンであるとの指摘もあった。今回、内田至氏にあらためて鑑定を依頼した。本号所載「青斑石鼈合子の鼈（スッポン）について」に詳しく述べられているが、足の鱗状片や第4・5指間のひらきなど、細部に至るまで実在のスッポンを忠実に写しており、中国や日本に分布するシナスッポンであるということが確認された。

亀は古今東西さまざまな材料で造形化されてきた。ことに我が国の文化に多大な影響を与えた中国においては、麒麟、鳳凰、龍と並び四霊の一に数えられ¹⁵⁾、しかも唯一の実在動物であり、大地を支え、長寿を象徴するとしてとくに尊崇され、単体で、またいわゆる亀趺など、その作例は枚挙に遑ない。我が国においてもしかりであるが、ただ、奈良時代以前の作例ということになると、銅鐸や鏡にあらわされたものを除くと、そう多くはない¹⁶⁾。しかも、それらは単体ではなく四神のうちの玄武として、あるいは鏡や印鑑の鈕¹⁷⁾としてあらわされたものが多い。

正倉院宝物に登場する亀は以下のとおりである。

紫檀木画碁局（北倉36）抽斗の碁石容器（挿図4）

槃龍背八角鏡（北倉42 - 16）鈕

雑色組縁飾残欠（中倉120）付属の木製金泥絵の亀形

金銀山水八卦背鏡（南倉70 - 1）鏡背文様

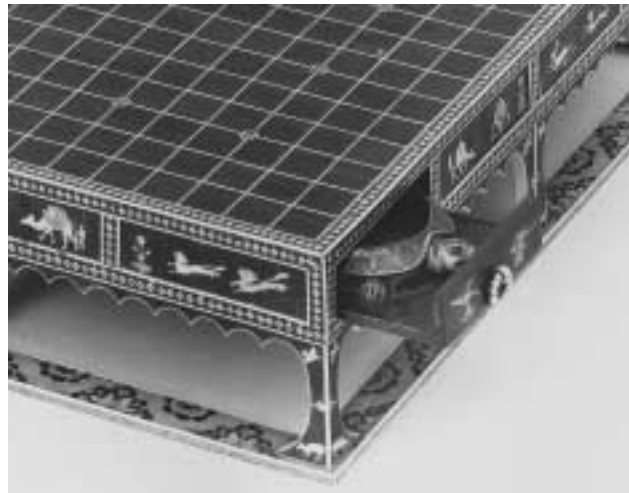
亀甲繫亀花文黄綾（中倉202，古屏風装40 - 1）

天寿国繡帳断片（中倉202，玻璃装184）

次いで、正倉院外に所在する単体であらわされた亀形をひろってみると、

吉岐笹塚古墳出土 金銅製亀形飾
 明日香村川原 亀石
 明日香村岡 酒船石遺跡亀形石槽
 藤原宮遺跡出土硯⁽⁸⁾
 神戸市宅原遺跡出土硯
 大阪・野中寺 三重塔心礎 亀石

などがあげられる。



挿図4 北倉36 紫檀木画棗局 抽斗の碁石容器

このうち、明日香の二例と野中寺の例は本品との用途的な関連はないが、酒船石遺跡のものは少なくとも水（あるいは他の液体）に関係するものであることは明らかであるから、参考にはなるかと思う。硯の二例は若干検討を要するであろう。周知のとおり、こうした亀形を硯に用いる先例は中国にある。これらは背の部分を彫り窪めて墨道、墨池とし、これに背甲にあたる蓋を被せる形式が普通である。正倉院の鼈合子はこのような形式ではなく、また墨を擦る用途には不適であろう。さらに硯に関連して言えば、硯滴とされる例⁽⁹⁾があり、注ぎ口を有していないが、本品の八稜形の皿をそうした用途に使えなくはない。但し、この皿は本体の腹部にぴったりと納まるもので（挿図2）、本体をまっすぐに持ち上げようとする、ひっかかって一緒に上がり、角度によっては本体からはずれて落下する。つまり、液体を容れておき、日常的に使用するにはやはり不向きなのである。

液体という話のついでに、これを杯とみるとどうであろうか。この皿は長径8センチで、たしかにこのくらいの大きさの杯は、正倉院宝物中にも犀角杯（北倉16）、瑪瑙杯（中倉77）がある。ただし、これらは深さが4～5センチあるのに対して、鼈合子の皿は深さ1センチ程度しかない。また中国では偏提という酒の容器で、形が鼈に似ているところから酒鼈と呼ばれる酒器があった⁽²⁰⁾。唐代の詩人白居易は亀形の酒器を持っていたというが、酒杯としても小さすぎるであろう。

わが国では古代に合子として亀形を用いた実例を知らないが、中国での例をいくつか見ておこう。

白鶴美術館 青銅鍍金亀形盒

個人蔵 青銅亀形盒⁽²¹⁾

山西省忻州地区博物館 八卦文亀形盒

法門寺博物館 鍍金亀形銀盒

これらの合子に共通して言えることは、背甲、または頭部を含む背甲より上半部が蓋となっていることである。そして山西省と法門寺のものは、鼻と口は孔が開き頸部を経て体部内に通じている。白鶴美術館の合子は蓋・身の内外に鍍金しており、「貴重な品、香料や薬をおさめた

ものではないだろうか」と推測されている²²。山西省のものは内面に黒色物質を塗っているが、こうしたことは内容物と関連するものと思われる。法門寺の合子は、茶葉を固めた餅茶を薬研（碾）で細かく砕いた粉末を容れるためのものである。茶も当時は薬として飲用された。

正倉院の鼈合子はこれらのように蓋と身が密着して収納空間を成すものではなく、もちろん鼻孔も貫通していない。その大きさからみて、嵩張るものではなく、粉末あるいは小粒状のものを納めたと考えるのが妥当であろう。それにしても、ここに掲げた例とは異なり、合子とは気づかない形に際だった特徴があると言える。

北斗七星

亀は四神のうちの玄武としてあらわされることがよく知られており、この鼈合子は背に北斗七星を負っているところから、北方の守護としての玄武に結びつけて考えようとするむきも多い。しかしながら玄武は亀に蛇が巻き付いた形をあらわすのが通例で²³、しかも北斗七星は中国の天文観においては北方に配置されるのではなく、あくまで天の中央部を構成する星座である。従って、北斗七星と亀（あるいは玄武）との組み合わせを方位の観点から限定的に考えるのは適切ではない。高句麗・薬水里古墳玄室では北壁に玄武とともに北斗七星があらわされているが、キトラ古墳では玄武は北壁に、北斗七星は天井天文図の中央部、強いて言えば東南に位置している。

さて、北斗七星は全天を通じて、形の美しさ、大きさ、星の明るさ等において星座を代表するもので、中国の星宿信仰の中でも重要な位置を占め、後代に至るまで北辰とならび北斗信仰は盛んであった。しばしば紹介される『史記』天官書の記述を以下に掲げる²⁴。

斗は天帝の乗車で、天の中央をめぐり、四方を統一し、陰陽の区別を立て、四季を分け、五行の活動をなめらかにし、二十四節気を動かす。これらのことはみな斗の役目である。一方、亀は中国古代より占いに用いられ、大地や水の母として、また長生、瑞兆、富などと結びつけられて崇められた²⁵。我が国においても霊亀の出現といった事件は正史にもいくつかみられ²⁶、鼈合子との関連では霊亀改元のきっかけとなった次の事例がしばしば指摘されている²⁷。

『続日本紀』霊亀元年（715）八月二十八日条²⁸

丁丑、左京人大初位下高田首久比麻呂献霊亀。長七寸、闊六寸。左眼白、右眼赤。頸著三公、背負七星。前脚並有離卦、後脚並有一爻。腹下赤白兩点、相次八字。

この高田首久比麻呂が献じたという霊亀は、いくつか知られる亀にまつわる事件のうちでも、「背に七星を負う」という点で注目すべきものである。ただ、長さ7寸、幅6寸、すなわち体長約20センチであるから、15センチの本品とはまず大きさが違っており、また目は左が白、右が赤であるのに対し、本品は両眼とも赤色であることが顕著な相違点である。ちなみに赤と白の目というのは、『説苑』弁物に、霊亀について「左精象日、右精象月」とあるように両眼を日月に象ったものとみなすことによるのであろう²⁹。その他、頸に三公、すなわち北極星を守護す

る3つの星、両脚に八卦の文様、腹下に点を連ねた八の字など、おそらく自然の斑紋や四肢の鱗状片などがそのように見なされたのであろうが³⁰⁾、本品には特にこれに当てるべき特徴的な文様は目につかない。単に七星と言えば一般的には北斗七星を指すようであり、三公とともにあることから北斗七星の可能性は高いが、慎重を期すれば限定的に考えない方がよいかもしれない³¹⁾。ともかくも、亀と七星が結びつく例が我が国で見いだされるということは確かめられる。



挿図5 范陽公章金印(『中国地域文化大系』より転載)

中国における北斗七星と亀との結びつきを窺わせる例として、『史記』亀策列伝に見える「北斗亀」が指摘されている³²⁾。富貴をもたらすという「八名亀」中の一であるが、これらは腹部に特徴ある文様を有するという点が鼈合子とは異なり、むしろ今見た“背に七星を負う霊亀”が「腹下赤白两点」とすることと関連が深い。八名亀の名称は星がほとんどであり、ここに言う北斗は北斗七星とみてよいが、いずれにしても、亀と北斗七星との具体的な造形については文献からは不明である。

亀の背に北斗七星あるいは星座をあらわした実例は希である。中国遼寧省北票県北燕馮素弗墓(北燕太平7<415>)から発見された「范陽公章」金印(挿図5)は、亀形の鈕を有した印鑑であるが、亀の背に円形の星とそれらを繋ぐ線を陰刻している。報告によれば、中央に銀河、その両側に北斗七星と南斗六星と解している³³⁾。印鑑に亀形鈕を用いるのはしばしば見られるが、星座の持つ意味は何であろうか。おそらく中国古来の伝説に見られるような、北斗は死を、南斗は生を司るとされていたことによるのではないだろうか³⁴⁾。つまりその印鑑を持つ君主等の長生、さらにはその権力、地位の永世の安泰を象徴したものではないだろうか。

この他、詳細は不明であるが唐代と伝えられる呉道子筆「鎮宅亀蛇」と題する石刻の拓本があり、中央に大きく玄武を描き、その背に天文図があらわされている³⁵⁾。僅かではあるが、中国古代思想における“亀と星”が造形化されていった様子を窺うことができる。

亀と宇宙

では何故亀の背に、しかも裏返しに北斗七星をあらわしたのであろうか。それは亀の背を天とみなしたからである。周知のとおり、古代中国には天円地方という宇宙観があった³⁶⁾。すなわち平らで方形の大地の上を、ドーム状の円形の天空がおおっているとする考え方である。

ちなみに『晋書』天文志には「天は円く蓋を張るが如し。地は方にして碁局の如し。」とある。先に正倉院宝物に登場する亀の例としてあげた紫檀木画碁局(挿図4)は、盤側面の抽斗に亀形の碁石入れを備えているが、これは方形の盤面を大地とみなし、その下に大地を支えるとされ

る亀を配置したものに他ならない。

そしてさらに、『説苑』弁物や『尚書』中候にみるような、靈龜なるものは天地を含む宇宙そのものを象徴するという考えに結びついていく。

『説苑』弁物³⁷⁾

靈龜文五色、似玉似金、背陰向陽。上隆象天、下平法地、槃衍象山。

「靈龜の文は五色にして、玉に似て金に似、陰に背き陽に向ふ。上は隆くして天を象り、下は平にして地を法り、槃衍して山を象る。」

すなわち円く隆起した背甲は天を、平らな腹部は地をあらわすとする。とすれば、天をあらわす背甲に星々があらわされるのも不思議はない。こう考えると、正倉院の龜合子のように北斗七星が裏返しにあらわされていることも理解できる。腹部の方を大地とみなすならば、天空である背を上方から見ると、星座は我々が地上から見るのとは裏返しの形に見えるはずだからである³⁸⁾。渾象つまり天球儀にあらわされた北斗七星に他ならない。小さな亀の体に壮大な思想が込められていることをあらためて認識する必要があるだろう。

七星剣

古来、造形物に星が表される例は多く、先に触れた古墳の天文図は典型例であり、後に密教美術においても関わりは深い。ただ器物のような工芸品に星座があらわされた例はそう多くはない。ここで北斗七星が主要なモチーフとして古代の工芸品にあらわされた例を見ておこう。

正倉院宝物 吳竹鞘御杖刀 三台、北斗七星、織女、牽牛、その間に雲（挿図6）

大阪四天王寺 七星剣 牽牛、織女、北斗七星、龍頭、その間に雲

奈良法隆寺金堂四天王像のうち持国天像の持つ大刀 北斗七星、日、月、山岳、その間に雲

長野・畠山氏蔵三寅剣 三公、三台、北斗七星、多聞天³⁹⁾

更に『国家珍宝帳』には刀身に象嵌の飾りを施すものが、今あげた御杖刀を含めて計九口記される。金、銀、あるいはその両方を用いたものがあり、図柄は龍と星がほとんどのものに含まれ、もっとも多種のものには日、月、星、龍、雲をあらわしている。星は九口すべてにあらわされており、星と刀との結びつきが強いものであったことを物語っている。『国家珍宝帳』には単に星としか記していないので判然としないが、おそらく北斗七星が主要なモチーフであったことは容易に察せられる⁴⁰⁾。

以上、いずれも刀剣の類である。周知のとおり、こうした北斗七星をあらわした剣は七星剣と呼ばれ、古代中国に発するものである⁴¹⁾。七星剣は破敵、護符、皇帝の権威を裏付ける宇宙万象の靈威の象徴といった意味を持ち、後代に至るまで記録、実例ともに少なからず見出せる。

星に対する信仰といえば道教との関わりに着目すべきであろう。この七星剣もしかりである。



挿図6 北倉39 吳竹鞘御杖刀 刀身 部分

唐代道教の巨匠司馬承禎の著した『含象劔鑑図』に載せる景震劔の佩表には裏返し北斗七星があらわされている。時の皇帝玄宗は道教の信仰篤く、司馬承禎は玄宗に自ら制作したと思われる鏡と劔を進上したという⁴²。また『唐大和上東征伝』によると、玄宗は鑑真を招請した遣唐使に道士の帯同を勧めたこともよく知られている。

多くの星座の中からひとつを選ぶとなると、北極星に次いで重要な位置を占め、天の中央部を巡る北斗七星がふさわしい。しかしながら、亀の不老長生、宇宙の象徴、北斗七星の天文観における位置は、意匠としてしかるべき選択であったとは言え、ただちには正倉院の鼈合子とは結びつけがたいであろう。腹内に皿を納め込んで、一見容器とはわからない造りは使用するにも便とは言えず、汎用の容器とするには適さないのではないだろうか。また北斗七星ただひとつを大きくあらわしており、その表現するところにも七星劔などとは違った特別な意味が潜んでいるかに感じられる。

3. 仙薬七星散と茯苓

仙薬七星散

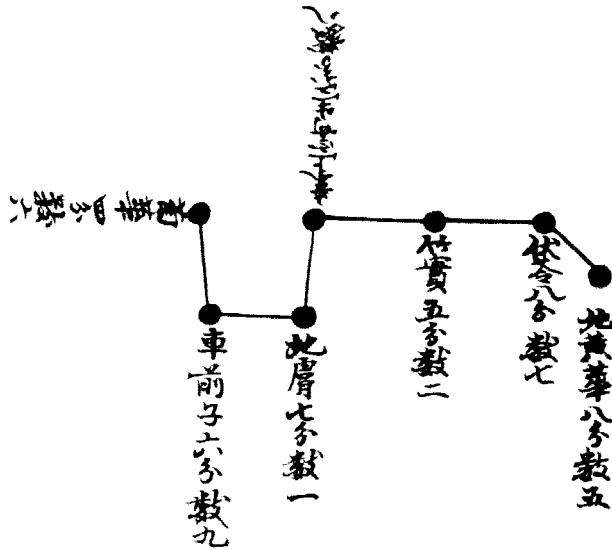
七星劔のように“七星”を冠したものを探してみると⁴³、“七星散”という散薬がある。これは晋の葛洪が撰した『神仙伝』巻十にみえる⁴⁴。

陳永伯者南陽人、得淮南王七星散方、試按合服之、二十一日忽然不知所在、永伯有兄子名増族、年十七亦服之、其父繫其足、閉密戸中、昼夜使人守視之、二十八日、亦復不見、不知所之、本方云服之三十日得仙、陳氏二子服未三十日、而失所在、後人不敢服僊去、必有僊官来迎、但人不見之耳。

以下に訳文を掲げる⁴⁵。

陳永伯は南陽の人であった。淮南王七星散の秘方を入手し、ためしに調剤して服すること二十一日にして、忽然として行方が知れなくなった。永伯には兄の子で増族というものがあつた。年十七歳、やはりこれを服用したのを、その父親が足を縛って密室中に閉じこめ、昼夜となく監視させておいたところ、二十八日めに、これまた姿を味まし、行方不明になった。その薬の処方には、「服用すること三十日にして仙人となる」とあつたが、陳氏の二人は服用して三十日にもならないうちに行方知れずになつたので、のちの人は進んで服用しようとはしなかつた。仙去する際には、かならず仙官が迎えにくる。ただし、人々にはそれが見えないだけである。

これによると淮南王七星散という、仙人になるための散薬の処方が伝えられていたことが解る。単に七星と言えば北斗七星との関連が濃厚であるが、ただこの記事のみではいまひとつ確証を得られない。



ところで、我が国において平安時代に成った『政事要略』という書物には「淮南王七神仙散方」という仙薬の処方が掲げられている。その末尾に、裏返しの北斗七星を描き、七つの星それぞれにこの仙薬を調剤する七薬種を配した図が付されている（挿図7）。

挿図7 『政事要略』巻九十五 淮南王七神仙散方 七星図 宮内庁保管

『政事要略』巻九十五 至要雑事⁶⁶（段落及び【 】は筆者）

淮南王七神仙散方

【A】欲急解云。取伏苓如龜鼈者。是名曰太一精。其氣上着石為鍾乳。着松為松蘿。着桑為桑上寄生。因物類着而生。此自然之道。故服之応七星也。故伏苓者太一之精也。地黄者土之精也。菊華者月之精也。車前子者雷電之精也。地膚者列星之精也。竹實者太陽之精也。桑上寄生者木之精也。凡七物上応七星。日月五星具此中矣。欲合之。齋戒九日。以王相日擣。今三指撮并華水。旦向東。以日如出。向日服之。陽日一服。陰日再服。竟卅九日。忽然去矣。

【B】天鳳元年中。南陽陳永伯兄名子恩。服此藥廿八日。忽然不知所在。永伯試作服之。廿八日復失所在。永伯小男增祿年十八。永伯婦及諸弟。復令復之。係其脚以糸繩。閉戸更迭晝夜坐守之。廿八日忽然復去。莫有見者。六本方卅九日乃吉。而今服者皆廿八日。或諸者不必仙。忽然不自覺。颺颺遠去。形隱景藏。不可復見。或化為異物也。

【C】伏苓不如鼈龜伏鷄者。皆生松脂也。不中用。竹實生藍田也。地黄取生。謂城者四月取之。竹實狀似小麦。地膚去皮。

前半では『欲急解』なる史料に拠って、【A】まずこの散薬の成分と服用法の要点を述べ、【B】次いでこの仙薬を服用した故事を紹介し、【C】最後に成分について再度補足している。まずこのBを見ると、天鳳元年（A.D. 14）南陽（河南省）の陳永伯の兄子恩がこの薬を服用したところ二十八日にして姿をくらました。この薬の処方では三十九日としているが、永伯や家族も同様にこの薬を服用したところ、やはり二十八日にして忽然として姿が見えなくなったという。

これは一読して先の『神仙伝』陳永伯伝と酷似していることに気づく。『神仙伝』では、まず

永伯が、次いで永伯の兄の子増族が昇仙した。要した服用日数にも若干の異同があるものの、同一の故事であることは明らかであろう。従って、『政事要略』に見える淮南王七神仙散と『神仙伝』の淮南王七星散とは同一の仙薬であるとみてよい(以後、七星散と記す)。それがどのような薬であったかは『政事要略』の記事Aの部分によって判明する。

では、七星散なる仙薬は、果たして北斗七星、また亀あるいはスッポンとどのように繋がるのであろうか。

Aによると、七星散とは茯苓、地黄、菊華、車前子、地膚、竹実、桑上寄生という七薬種を調剤したものである。茯苓は太一、地黄は土、菊華は月、車前子は雷電、地膚は列星、竹実は太陽、桑上寄生は木の、それぞれ精であるとしている。すなわち“七物(の気)は(天に)上って七星に应じる。日月五星はこの中に具わる。”のだという。そして、これらを合したもの、つまり七星散を服用すれば三十九日を経て忽然として去る(仙去、昇仙する)、つまり仙人になれると言うのである。

ここで七星散の七星とは北斗七星と考えられるが、日月五星とは太一、土(星)、月、雷電⁽⁴⁷⁾、列星、太陽、木(星)を指しているようである。ふつう、日月五星といえば太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星を指すが、北斗七星に拠って日月五星の運行を正すとか、北斗七星はそれぞれ日月五星の政を賞罰するとか言われ、ともかくも七物、日月五星をもっとも重要な星宿である北斗七星に重ね合わせたのであろうか。

茯苓と亀鼈

さて、いよいよ七星散と亀の関係に及ばねばならない。

『政事要略』淮南王七神仙人散方条の冒頭Aでまず“茯苓の亀鼈に似たものを採取したなら、これを名付けて太一の精という”と言い、本条末尾のCでは“茯苓の亀鼈や伏鷄に似ていないものは皆松脂を生じるもので、用いるには適さない”と念を押している。茯苓であればよいというのではなく、その色と形が亀または鼈に似ていることが七星散の調合に必須であることが解る。そして、亀鼈に似た茯苓は太一の精とするが、太一は言うまでもなく古代中国の天文思想においては最高の存在、宇宙の支配者、天帝のことである。亀鼈に似た茯苓が七薬種のうち最も重要な位置を占めている。

茯苓は伏霊とも呼ばれ、古来より不死の仙薬として知られ、伏亀とともに尊ばれた。すなわち『淮南子』説山訓に「千年之松、下有茯苓、上有兔絲、上有叢菁、下伏亀」とあり、また『史記』龜策列伝に「下有伏霊、上有兔絲、上有擣菁、下有神亀」、「伏霊者、千歳松根也、食之不死」とある。『欲急解』に「着松為松蘿」とあるのは「下有茯苓、上有兔絲」に照合する。茯苓は土中で松の根に生じたマツホドの菌核であるが、上から見てはわからない、隠れた茯苓や伏亀(神亀)を見つけだすことが大切であることを説いている。茯苓は茶色を呈し、形は状況によってさまざまであるが、色といい、形といい、鼈合子にそっくりのものが現に存在する⁽⁴⁸⁾。

Cの箇所によると亀鼈の他に伏鷄に似た茯苓でもよいとしている。この伏鷄、すなわち伏し

た鶏については、伏鼈という用語とともに他にも間々用例があるが、ここでは次の『漢書』天文志の記述が参考になるかもしれない。

「旬始、出北斗傍、状如雄鶏、其怒青黑色、象伏鼈」

北斗の傍らに出る旬始という星座は雄鶏に似た形であるが、青黒色になって伏した鼈のようでもあると言う。八名亀中の北斗亀に加えて、ここでもまた、亀（鼈）と北斗七星との関わりが窺われる。

七葉種から七星に結びつけたのか、日月五星という七星を基にして七葉種を選んだのかは解らないが、ともかくも七つの星（と葉種）を形にあらわす必要があった。星座の中でも統制、破敵、寿命などに靈威を持つ北斗七星は、そのよく知られた特徴的な美しい形もあって、七星散を成す七星七葉種を象徴的に図示するのに格好の星座であったのであろう。こうした北斗七星を亀の背に裏返しにあらわす必然性については先に述べたとおりであるが、では『政事要略』に引く『欲急解』にも何故裏返しにあらわしたのであろうか。思うに、天円地方という思想を介して亀と北斗七星とが一体となったイメージが、この時既に出来上がっていたからではないだろうか。それはともかくも、正倉院の鼈合子はこの七星散を納めるための容器であったと考えたい。

正倉院薬物と道教

正倉院には現在、六十余種の生薬が伝存しているが、それらの中には鼈合子に入っていたと考えられる七星散に当たる製剤はない。また、七星散の七種の薬種のいずれも発見されていない。ところで、いわゆる正倉院薬物の中心をなすものは、天平勝宝八歳(756)に光明皇太后が東大寺に献納した六十種の薬物である。第一次正倉院薬物調査に参加した益富壽之助氏は、このうち金石陵、石水氷、紫雪という合剤が、当時中国で盛んであった仙薬寒食散の解散薬であること、また鍾乳床、赤石脂、白石英などは寒食散の原料であることに着目し、石薬服用がわが国にも波及し、「我が皇宮に於いて服石のあった可能性を考え得る」と述べている⁽⁴⁹⁾。

これに関して和田萃氏も、わが国古代と道教の関わりという視点から、正倉院薬物の特色として、石薬、なかでも仙薬の効能をもつ玉石上品のものが多いことを挙げ、寒食散の解散薬の存在から「奈良時代においても仙薬に対する関心が貴族層を中心に高かったことが推測される」と指摘している⁽⁵⁰⁾。

わが国では道教の体系的な受容は行われなかったが、仏教、道教、儒教の影響は多かれ少なかれわが国古代文化に及んでいることは言うまでもない。正倉院宝物にも道教的要素を見出せるものがあり、さらに薬物にも道教的要素を指摘できるならば、鼈合子という仙薬の容器が伝わったことも不思議ではない。

七星散はあまり知られていなかったようであるが、このような特別な容器に容れられたのは、秘薬として珍重されたからではないであろうか。鼈合子が一見、容器とはわからない、北斗七星を負ったスプーンの置物として造られたのにはそれなりの意味があった。

蛇紋岩と宇宙

鼈合子の蛇紋岩は暗青、濃緑、茶（褐）の入り混じった色合いであるが、先に挙げた蛇紋岩製の正倉院宝物をみると、横笛と尺八は灰緑、碁石は黒（暗緑）、刀子は淡緑を呈す。硯は淡褐の斑文が混じって鼈合子にやや近いが、やはり鼈合子にみる茶の混色の目立った色味は他の蛇紋岩製宝物とは異なっている⁵¹⁾。蛇紋岩の使用が、時代や場所による流行や特色であるのかどうかについては他の多くの例を知らないのだから解らないが、もし石材ということなら玉や大理石という選択の方が一般的ではないであろうか。玉鼈という遺品もしばしばみられる。薬物の容器という点からみると、正倉院薬物の場合を参考にすると、袋類を除くと、木製の合子、須恵器の合子や壺などがあり⁵²⁾、先に挙げた亀形合子の例では銅・銀器があり、これらが一般的であったかにみられる。蛇紋岩、なかでも茶色味のあるものを用いたのは、たまたま産地あるいは生成年代の違いであるとも考えることもできる。しかし、この鼈合子をいま見てきたような中国古代思想の所産と考えるなら、今少しの検討を試みておきたい。

数多く残る亀の造形品を通覧すると、その素材はさまざまであり、実在の亀の色合いをとくに意識したものは少ない。その中であって鼈合子は、実在のスッポン、ひいては伏苓に、形のみならず色合いまでも近づけることが強く意識されている。それはとりもなおさず、亀鼈、伏苓、そして亀鼈に似た伏苓、それぞれの重要性が強く意識されたからであろう。

また、先に掲げた『説苑』では、靈鼈というものは五色で、さらに玉や金に似ているとしている。五色とは言うまでもなく五行説に基づく青、赤、白、黒（玄）、その中央に位置する黄である。玉や金にも似るとするところから察すると、靈鼈はこれらが渾然一体となった色合いを呈しているということであろう。鼈合子の表面に金泥（粉）を散らしたかと思われることも、ここで想起すべきであろう。鼈合子の場合、蛇紋岩の中でも茶色味が特徴的であるが、これを黄とみると、道教系で重視された色であることに注意しておきたい⁵³⁾。また、『易経』坤には「夫玄黄者、天地之雜也、天玄而地黄」とあって、天地のまじわり、すなわち宇宙は天の玄（黒）と地の黄の混じった色を成すことを意味しているかと考えられる。

鼈合子の思想的背景を考えると、これにふさわしい石材が明確な意図をもって選択されたように感じられる。

おわりに

青斑石鼈合子は以下の特徴を有する。

象形品としてまことに写実的な表現である。

背に北斗七星を、しかも裏返しにあらわしている。

腹下に身（皿）を隠して、一見、容器とはわからない。

蛇紋岩、しかも茶色味の強いものを用いている。

伏苓と亀の不老長生をもとにした仙薬にとっては、その容器は形態的にも伏苓に通じるリア

ルなスッポンがふさわしかった。天円地方という宇宙観を象徴した亀を象り、その背を星宿信仰を代表する北斗七星で飾った。背が天空であるが故に、それは裏返しにあらわされた。そして、蛇紋岩は亀、伏苓、宇宙、すべてを包含する色を有していた。

我が国では体系的な道教の受容は行われなかったが、唐代文化の摂取のなかで、神仙思想の所産が伝えられた。小さな亀に体现された大宇宙、そしてそこに浮かぶ北斗七星に不老長生への願いをこめて、この龜合子に仙薬を秘したのであろう。

注

- (1) 『國華餘芳』大蔵省印刷局 1880 / 1
『English Catalogue of Treasures in the Imperial Repository Shosoin』帝室博物館 1932 / 12
但し『正倉院御物図録』6 (帝室博物館 1931 / 4)には北斗七星の記述は無く、その後、1984、1985年に実施された石製宝物材質調査において再発見された。
- (2) カメとスッポンはいずれもカメ目であり、また本論では厳密に区別する必要がないので単に亀とした場合はスッポンを含むこととする。なお、中国ではいわゆるカメには種々の呼称があるが、一方では“龜鼈”というようにまとめて表記することも多い。
- (3) その他、寸法と形態の詳細は本号掲載内田至「青斑石龜合子の鼈(スッポン)について」中の実測図参照。
- (4) この深紅色の琥珀は紫外線蛍光反応が国産品とは異なり、ミャンマー北部産のものに特徴が非常に近いという(後掲注⁽⁶⁾「石製宝物の材質調査報告」)。
- (5) 古墳天文図などでは星は金または朱が多いようであるが他の組み合わせもみられる。
高松塚古墳天文図 星は金箔、線は朱
長野・畠山氏蔵三寅劔 星は銀、線は金象嵌(後掲注⁽³⁹⁾西山要一「東アジアの古代象嵌銘文大刀」)
浙江臨安五代吳越国康陵天文図 星・線ともに金箔(『文物』525 2000 / 2)
- (6) 本品の詳しい調査報告は以下を参照されたい。
橋本義彦「口絵解説 青斑石龜合子」『正倉院年報』8 1986 / 3
「年次報告 X線分析による宝物の材質調査」『正倉院年報』9 1987 / 3
「石製宝物の材質調査報告」『正倉院年報』10 1988 / 3
「年次報告 調査」『正倉院紀要』22 2000 / 3
- (7) 「東大寺勅封蔵開検目録」(『続々群書類従』16)
繪櫃一合
納木筆二管 大色紙二合 墨二廷 研一基
会前加納墨五廷 水精玉四果 眉間分
天平勝宝五年七月一日 検納櫃銘如此 不知員数
- (8) 伊藤純「風字硯をめぐるいくつかの問題 - 考古資料と伝世品 - 」(『ヒストリア』135) 1992 / 6
- (9) 正倉院事務所編『正倉院の刀剣』日本経済新聞社、1974 / 3
- (10) これらの碁子や合子との関係は明らかではないが、国家珍宝帳記載の木画紫檀碁局(北倉36)は十七個の星目を用いる朝鮮様式のものと言われている。
増川宏一「宮廷の盤上遊戯」『週刊朝日百科皇室の名宝』正倉院中倉 1999 / 5

また幕局に用いられた半透明の角質様物質の使用も半島において見られる技法である。

- (11) 『中国彫塑史図録』3 上海人民美術出版社 1987/3
- (12) 秋山進午「隋唐式鏡綜論」(『泉屋博古館紀要』11) 1995/5 p.45
- (13) 「東大寺正倉院開封記」(『続々群書類従』16)
- (14) 「正倉院御宝物目録 天保四年御開封」(『続々群書類従』16)
- (15) 『礼記』礼運に、四霊は麟鳳龜龍とする。
- (16) 千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』東方出版 2001/4
- (17) 『淮南子』説林訓に、亀の鈕のある印璽は賢者が身に佩びるものとある。
- (18) 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』20 奈良国立文化財研究所 1990/5 p.13
- (19) 例えば、イタリア・バルマ中国芸術博物館蔵東漢建安五年銘陶硯滴(『故宮博物院院刊』89 pl.6 2000/5)。また和泉市久保惣記念美術館蔵の佐波理製のものなど。
- (20) 今日でも酒器の蓋に亀形の鈕がよく見られる。
- (21) 船木佳代子『特別展 蓬莱山 - 鶴・亀・松 -』和泉市久保惣記念美術館 1998/10
- (22) 前掲『特別展 蓬莱山 - 鶴・亀・松 -』作品解説
- (23) 但し、『尚書正義』などの文献中には玄武については亀の記述のみである。
- (24) 当該部分は吉田邦邦訳注による(『中国古典文学大系』10, 1968/2)。
- (25) 最近、亀信仰一般を扱った論考に饒宗頤「論亀為水母及有関問題」(『文物』521, 1999/10)がある。
- (26) 『新日本古典文学大系 続日本紀 二』(岩波書店)の補注p.501に詳しい。
- (27) 前掲注(6)橋本義彦「口絵解説 青斑石鼈合子」ほか。
- (28) 『新日本古典文学大系 続日本紀 一』 岩波書店 1989/3。
- (29) 前掲注(26)補注においては、目が赤いところから「白亀」と推定する。
- (30) 八卦文については本号掲載の内田至「青斑石鼈合子の鼈(スッポン)について」参照。
- (31) 例えば二十八宿のうち南方第四宿を七星と呼び、『礼記』月令に「季春之月、日在胃、昏七星中」とある。
- (32) 奈良国立博物館『平成12年度正倉院展』図録解説。
『史記』亀策列伝
北斗龜，南辰龜，五星龜，八風龜，二十八宿龜，日月龜，九州龜，玉龜：凡八名龜。龜圖各有文在腹下，文云云者，此某之龜也。略記其大指，不寫其圖
- (33) 黎瑤渤「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』202 1973/3
『中国地域文化大系 東北文化』商務印書館 1996/3
- (34) 晋の干宝が著した小説集『搜神記』に見られる。
- (35) Osvald Siren, Chinese Painting, vol. 1, New York, 1956, pl. 16
北京図書館善本部金石組編『北京図書館蔵画像拓本匯編』10 書目文献出版社 1993/7
- (36) 『淮南子』天文訓に「天の道は円，地の道は方」とある。
- (37) 『漢魏叢書』上海，涵芬楼 1925
訳文は大林太良「東アジア王権神話における亀」(『教養学科紀要』11, 1979/3)による。なお同論文で『尚書』中候に「靈亀は玄文五色にして，神靈の精なり。上は貝くして天を法どり，下は方にして地を法どる。」とあると指摘されているが、『百部叢書集成』および『玉函山房輯佚書』を検索したが該当原文を見出せなかった。『太平御覧』鱗介部には「雒書曰」としてほぼ同様の記事を掲げている。

- (38) 墓室の天井に天文図を描く例は多いが、そこに北斗七星を裏返しに表すことは不可解である。例えば、アスターナ唐墓(『文物』1973/10)、河北省張世卿墓(「遼代彩繪星図是我国天文史上的重要发现」『文物』1975/8)など。
- (39) 西山要一「東アジアの古代象嵌銘文大刀」『文化財学報』17 1999/4
- (40) 三宅久雄「呉竹鞘御杖刀」『白い国の詩』528 2000/8
- (41) 七星剣については以下の論考に詳しい。なお正倉院と四天王寺の剣にあらわされた星座の同定については杉原氏の説に従った。
- たなかしげひさ「丙子椒林・七星剣と法隆寺の日月剣」『仏教芸術』56 1965/1
- 野尻抱影「七星剣の天文考」『星と東方美術』恒星社厚生閣 1971/4
- 杉原たく哉「七星剣の図様とその思想 法隆寺・四天王寺・正倉院所蔵の三剣をめぐる」『美術史研究』21 1984/3
- 小笠原信夫「ある七星剣について - 付・猪槍のこと - 」『刀剣美術』416 1991
- (42) 福永光司「道教における鏡と劔」『東方学報』45 1973/9
- (43) 『三才図会』には「天然七星硯」として、頭部に七星文のある風字硯の図を掲げている。
- (44) 『叢書集成初編神仙傳』中華書局 1991
- (45) 沢田瑞穂訳注『中国古典文学大系』8 平凡社 1969/9
- (46) 『新訂増補 国史大系』28 吉川弘文館 1964/9
- (47) 室宿の西南にあるとされる星宿のことか。
- (48) 例えば難波恒雄『和漢薬百科図鑑Ⅱ』保育社、1994/6、p1.67
- なお、大阪大学米田該典氏によると、北陸・山陰地方に今日でも茯苓に対する独特の信仰がみられるとのことである。
- (49) 益富壽之助『正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究』日本礦物趣味の会 1958/3
- 寒食散の実体、それに中国、日本における服用の事情については本書に詳しい。また、平安時代に入っての寒食散の服用とその解散薬である「正倉院施入の金石陵、石水氷の著減とは何かの関係がありそうに思われる」と指摘している。
- (50) 和田萃「薬獵と『本草集注』 - 日本古代の民間道教の実態 - 」(野口鐵郎・中村璋八編『古代文化の展開と道教』雄山閣) 1997/3
- (51) この茶色は輝石に基づく(前掲注⁽⁶⁾「年次報告 X線分析による宝物の材質調査」)。
- (52) その他、錫薬壺(北倉128)と称するものがあるが薬物を容れたかどうかは確証がない。
- (53) 重松明久『古代国家と道教』吉川弘文館 1985/12 pp.352 - 357

本稿を草するに当たって以下の各氏の御教示を得ました。末筆ながら記して謝意を表します。

西口 寿生(奈良国立文化財研究所)
 曾布川 寛(京都大学人文科学研究所)
 船木佳代子(和泉市久保惣記念美術館)
 宮島 一彦(同志社大学理工学研究所)
 米田 該典(大阪大学大学院薬学研究科)